

であった。子供がなかったので、早くから東京帝国大学総長を務めた理学博士松井直吉の子八郎を養嗣子としたが、八郎は医業を継がず、歴史を好み、「日本甲冑の研究」を行って帝国学士院賞を授けられた。八郎のこの研究には、養祖父兼善、養父兼輔二人の熱心な後援があったそうである。

(山口県萩市)

ヴェサリウスのファブリカについて

酒井 恒

ヴェサリウスのファブリカは一六五二年にラテン語で発行され、著者が所有するものは合本であり、一九六四年に復刻されたものである。解剖学の図がペン画で正確に描かれ、記号をつけて別項目として解説されている。ヴェサリウスのファブリカの図は英語とドイツ語に訳されている。しかし、英語訳書はすべての図を掲載しているが、その順序は原典と一致せず、意訳しており、ドイツ語訳書ではその一部を訳しているに過ぎない。原典と比較しつつ述べる。図の記号は著者にはどこにあるのかわからないものがある。記号は明瞭に示すべきであると思う。そこで、著者はヴェサリウスのファブリカの図の日本語訳を試みることにした。図は本文のあいだに挿入されているものと、頁をそのために割いて解説しているものがある。本文も解説文もラテン語で書かれているので、難解である。初めに骨学

の一般的なことを骨を例に取り解説し、次に各論、各骨について解説している。その一部について述べる。

(名古屋大学医学部)

唐代史における皇帝と医学

—太宗の場合—

山本 徳子

歴史の中における医学については、政治・経済・社会等との関係のあることは、周知の通りである。そのような事柄、ことに存廃に関わりのある「人」といえば、政治権力に強い力をもっている者であろう。これを中国史、唐代についていえば、皇帝が該当しよう。

そこで、今は、唐王朝第二代目の皇帝である太宗と医学との関わりあいを巡って考察したい。

太宗は、かつて医方・鍼灸書を読んだことがある。それによって、背部に五臓の孔穴があることを知り、五刑の中の一つである刑罰で、背中を笞で打つことをやめさせている。

また、貞観十九年(六四五)に遼東を攻めた時のこと、江夏王道宗が足を傷つけた際、それに針治療を施している。